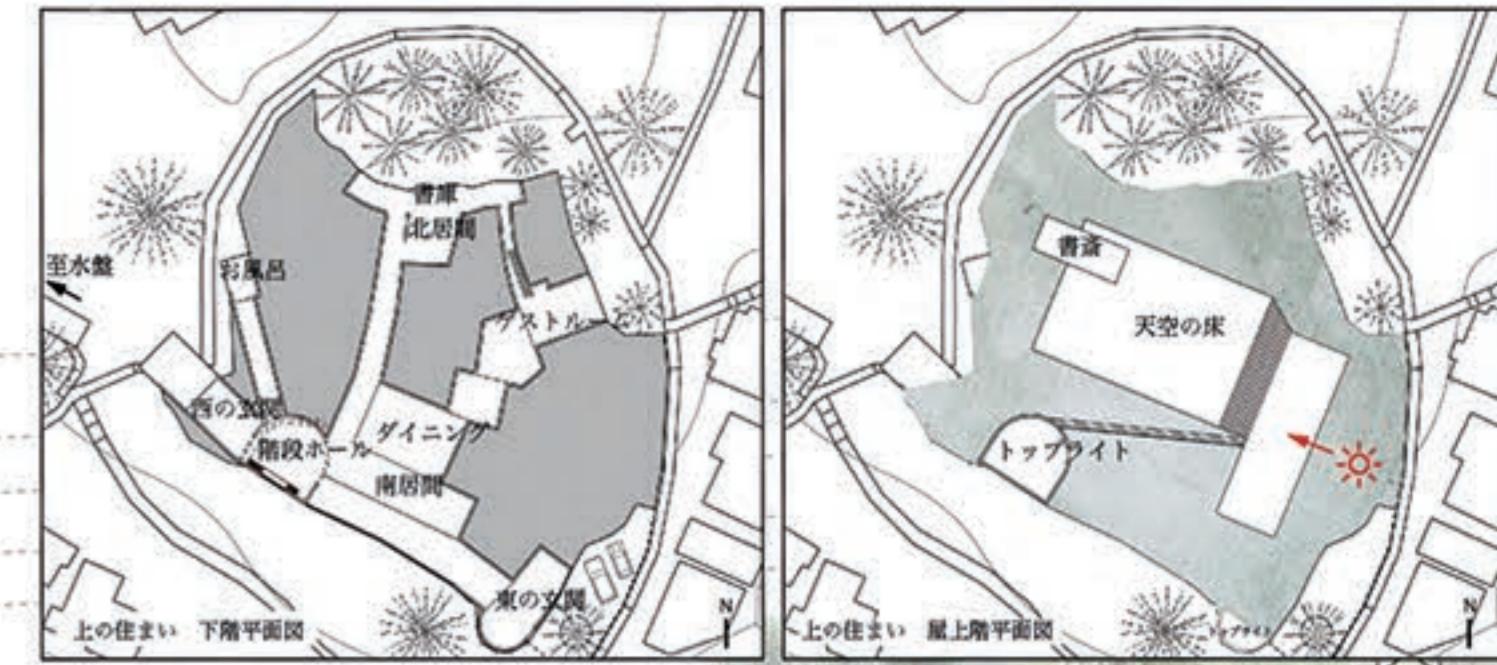


京急本線 (逸見一汐入間)

東の玄関

崖を掘った階段



60m

50m

40m

30m

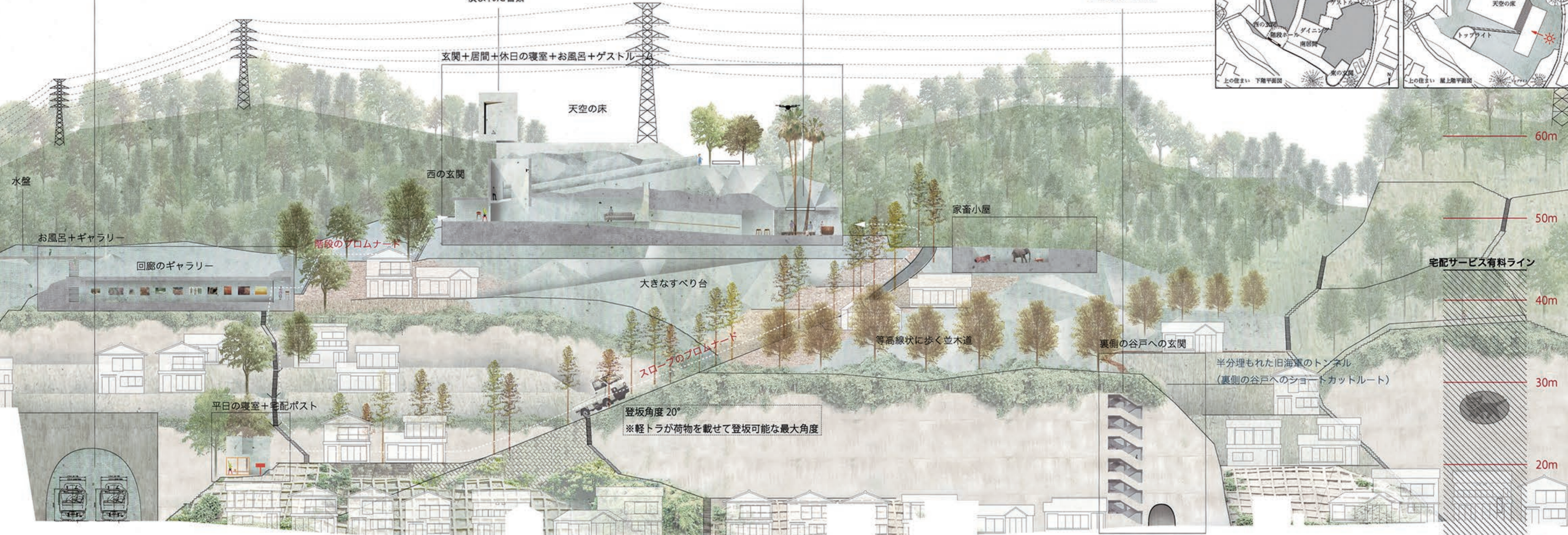
20m

10m

宅配サービス有料ライン

半分埋もれた旧海軍のトンネル
(裏側の谷戸へのショートカットルート)

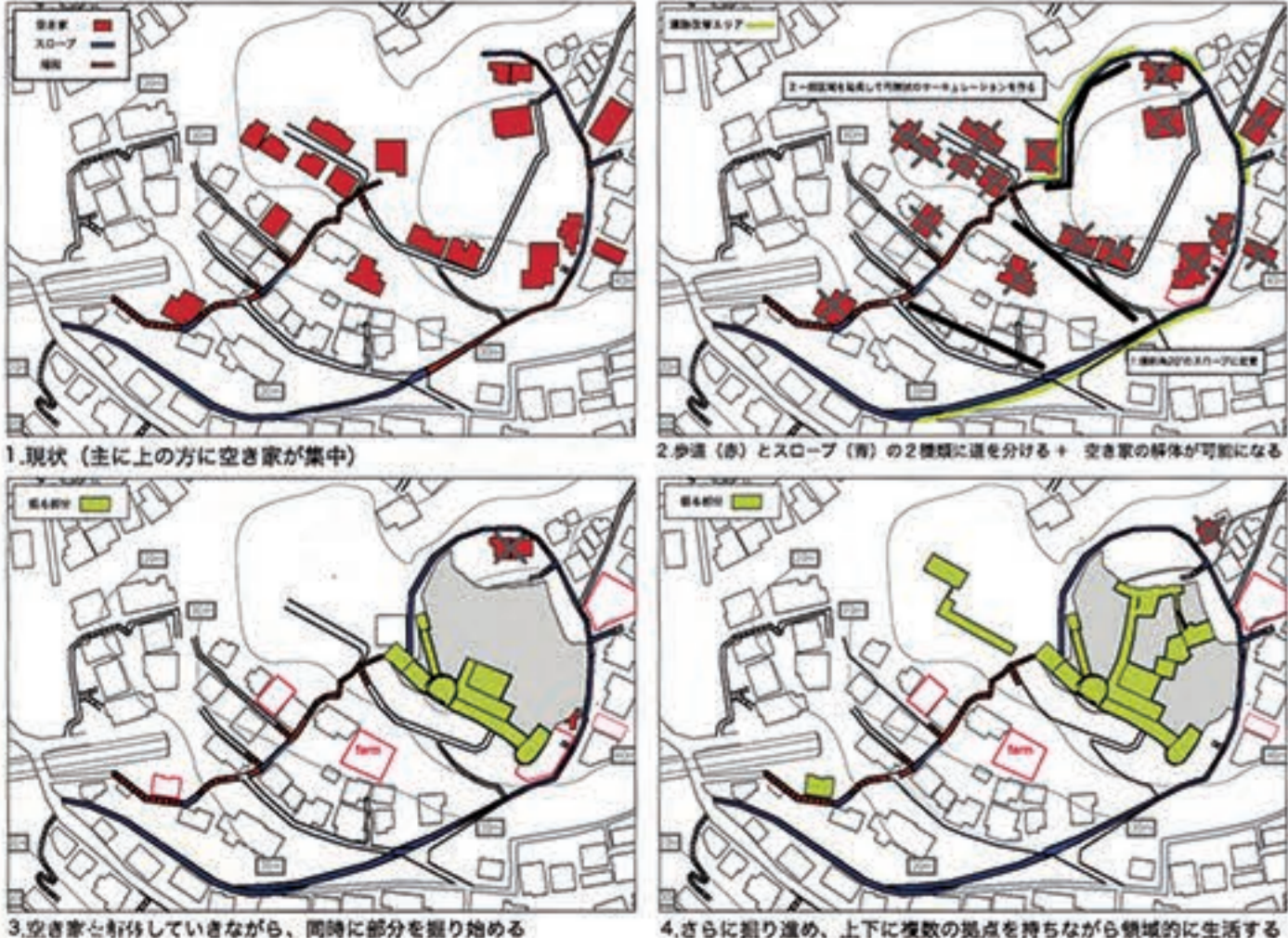
登坂角度 20°
※軽トラが荷物を載せて登坂可能な最大角度



砂岩の家

山を「掘る」ことで住宅を作る。旧日本海軍の要塞都市であった横須賀の谷戸地域は、緊急時にいつでも軍港に駆けつけられるよう、本来人が住めないような急斜面地を軍人自らが段々状に整形してできた街である。これを可能にしたのが砂岩という掘りやすく崩れにくい地質であり、「砂岩」という環境的条件 × 「軍人という人間気質」によってこの段々状の街が形成されてきた。

一方で現在の横須賀は郊外ベッタタウンとしての開発が進み、生活に不便な上の方は人が住まなくなり限界集落化している。それらは経済的にほとんど価値のない場所となっている。そこでそれを逆手に取り、「掘る」という行為によって谷戸全体を1つの住宅として計画していく。足し算的に少しずつ掘って行きながら、同時に全体も整えて行くような、どこまでが住宅なのか分からない新しい「大きな住宅」の提案である。



道をスロープ専用道(青)と階段道(赤)の2種類に分ける。この敷地では、登坂角度が20°以内のスロープ専用道を通すことで軽トラックのアクセスが可能になり、上の方の空き家が解体できるようになる。解体していく行為と新しく「掘る」プロセスが同時に進行していきながら、少しずつ谷戸全体が領域的な生活の場に変わっていくことをここでは想定している。

